

小さな子どもにも詩や歌を

菊永 謙

三歳から五、六歳の子どもたちに絵本や短い詩や歌を読んでもあげると、とても楽しく喜んで聞いて呉れる。子どもは同じ繰り返しのお話を好む。三人の兄弟や姉妹が同じように試して、お兄（姉）ちゃんとまんなが失敗をして、末っ子が上手にうまく成功する昔話風のお話や絵本を読んでもあげると、大喜びをする。お話の筋道をよくよく知っていながらも、そのお話を読んで欲しくて、本棚からお気に入りの絵本を持って来て読んでと差し出す。そして、お目当ての場面に差し掛かると声をあげて喜び、もう一度その場面を読んで求めてくる。親と幼い子どもとが共通の喜びや楽しみを持つ絵本やお話、詩や歌をいくつか持つことは、大きなかけがえのない財産と云わねばなるまい。大好きな親や周りの大人からお話を読んでもらい、途中ドキドキ、ハラハラして、最後には安心できるのしい物語を共有する。そして、その大好きな人のかたわらで安心してほえみ、眠る喜びは、幼い子どもたちの内なる大切な何か

を育てていくのであろう。

子どもが本好き、お話好きになるには、母親や父親、保育者、教師たちが、まずは子どもに楽しくリズムミカルな言葉による絵本やお話をいくつも聞かせてあげる事から始めるのだろう。子どもは何回も繰り返し読んでもらった楽しく、スリルのあるお話のなから、とりわけお気に入りのお話や詩の本を、ただただしくもひらがなをひろい読みし自ら読んでみたく思うだろう。ただ、絵本ならば具体的な絵本をいくつか提示できそうだが、詩の場合、この一冊から始めようと提示できそうもない。いくつかの詩集やアンソロジーから、幼い子どもたちには是非読み書かせて、読んで欲しい詩作品を一例として具体的に提示していく他ないように思う。

一、生活の詩

まず最初は、幼い子どもたちにとって最も大切な母親（もしくは、養育者）との関わりを歌った詩をいくつか記してみよう。広く知られる田中ナナの「おかあさん」は、発表されて五十年の歳月が流れているのに、今なお新鮮な情感をたたえている。子どもたちの日々の生活の場における母と子のかかわり、会話から生まれたやさしい歌は、今も子どもたちにみずみずしく歌い継がれている。